

キャンディから西の方へ30km、車で1時間半も走るとキャーガッラの町の郊外に出る。ピンナワラ・ゾウの孤児院は、大人気のスリランカ観光のメインスポットである。ゾウが練り歩く姿は、決して派手なショーとは云いかねるが、日本では見られない光景である。孤児院で育てられたゾウは、ゾウ使いかお寺にもらわれていく。東京多摩動物園や山口県周防市にある徳山動物園など、日本の動物園にプレゼントされたゾウもピンナワラ・ゾウの孤児院出身である。お寺にもらわれ飼われると、ペラヘラ祭で活躍することになる。因みに、タランガッレ・ソーマシリ師が住職を務めるサママハ・ヴィハラヤ(平和寺)にも、政府から1頭与えられた。仏教では、お釈迦さまの母上が懐妊された時、ゾウの夢をみたことから大切な動物とみなされてきた。内外の旅行者の注目度上昇中の「ピンナワラ・ライブ」は、癒しのステージである。

### ゾウの孤児院

ピンナワラのゾウの孤児院に幾度となく訪れているうちに、ミルクタイムに出遭った。いつもご一緒して下さるソーマシリ師が「1日3回、バケツいっぱいミルクを大きな哺乳ビンで次、次と飲ませるのだよ。9歳から15歳の子どものゾウにね」と云われた。ゾウたちが一生懸命ビン口くちに吸いついている姿は感動的であった。

「午後2時から乳児以外のゾウが集って、水浴びがあるから観ていく?」「観たい!!」とのことで、おみやげ物屋に入って待つことにした。何気なく店に並べられたみやげ物を見ていたら「ゾウのうんち」ペーパーが売られていた。ゾウのうんちペーパーとは珍妙で捨て難

いおみやげである。お店で、ペーパーになるまでの行程を簡単に教えてもらった。葉っぱや草花、果実、野菜を主食とする草食のゾウは、大人になると1日120kgのうんちをするそうである。その大部分が繊維質であり、煮沸してそれを取り出し再生紙を混ぜてパルプにしたものを、水の中で漉すく。その後は、手作業で水分を絞り出し1枚ずつはがして乾かす。いろいろに加工して商品として完成させるのだそうだ。メモノートなどを買って求めたところで、店の外からなにやらざわめきが聞こえてきた。どっしり、どっしりとゾウ使いに率かれてゾウ達が歩いて来た。耳をぱたぱたさせて体温調節したり尻尾を振ったりしながら行進していく。レストランの下の川で水浴びが行われるので、私たちは後について行き、ゾウ達が水浴びする姿を楽しんだ。

川の中で、ゾウは思い思いの水の浴び方と遊び方で、時には飼育係の方が振り廻される場面もみられた。沐浴風景は圧巻であった。アフリカでみたゾウよりも小さくて四角く見えた。

ゾウの近くに寄ってみると、浅いしわがあり固い毛が生えている。スリランカのゾウはおとなしい方だと聞いている。ピンナワラのゾウの孤児院では、ジャングルで親にはぐれてしまったり、子ゾウの時に失明したり、親と死別してしまったゾウを引き取っている。1975年2月に、5頭のゾウを受け入れたのを機縁として、野生ゾウを保護する目的で始められた。ゾウの研究と教育機関を兼ねる機能も担い、10人以上の獣医が待機している。

ソーマシリ師が「ゾウの睡眠は2～3時間。バナナやりんご、さとうきびや蜂蜜、それに塩も大好きだよ。人間と同じようにゾウだってストレスがたまる。その時は、尻尾と鼻を上げて怒る。優しくすればそれなりに懐なついてくる。たまに、ゾウ使いがゾウに蹴られたりするのは、日頃、鞭で打られたりいじわるされたことを覚えているからなんだ。ゾウはとても利巧だからね…」とゾウについて話して下さった。



ゾウの孤児院門(グーグル・パノラミオから)





ゾウの孤児院の様子(グーグル・パノラミオから)

ピンナワラ孤児院の広大な敷地に、現在、90頭程のゾウが生活している。急増するホテル建設、インフラ整備ラッシュ…内戦後の復興に沸いているスリランカ。ハンバントタ・エアポートにみる開発事業進行に拠って森林が伐採されるにつれてゾウが住む場所も狭められ、ゾウが人間社会に被害を与えるようになってきた。ここに来て自然に生きるゾウと近代化される人間社会とどのようにバランスを取って行くかというに難題が生じている。

### サママハ・ヴィハラヤのペラヘラ祭

スリランカゾウは、仏教寺院の行事には毎回必ずといっていい程、大きな役割を果たしている。キャンディやコロンボの名だたるペラヘラ祭はさておいて、各地方でそれぞれ特色あるペラヘラ祭が催されてきている。私にとってのペラヘラ祭はサママハ・ヴィハラヤ(平和寺)のものである。

この寺の住職であるソーマシリ師は5月開催の祭前の期間は、この祭の指揮を執るので、連日大忙しの日々である。この重要な祭をより盛大にするためには莫大な費用がかかるのだ。祭への寄進を住職自ら募<sup>つ</sup>って歩かねばならない。ゾウをトラックに乗せて運ぶ丈でも距離によっては日本円で1頭3万円也になると云う。

1964年から始まるサママハ・ヴィハラヤのペラヘラ祭は2014年に節目となる50周年を迎えた。もともとこの祭りはヒンドゥ教の雨乞いから始まり、年月を経てキャンディで仏歯を背負ったゾウを行列に加えられるようになったと伝えられる。以来、王権に仏教が結び付き盛大なパレードに発展した。2014年5月15日ポヤデー(満月祭)の翌日の16日、サママハ・ヴィハラヤでは僧俗合わせた寺関係者たちは境内をかけ走り廻るような忙しさであった。前日、

祭の為に用意された材料が運ばれると、専門のコックによって5000人分のカレーが大釜で作られた。このカレーは遠路はるばる参拝に来られる人、祭の手伝いの人、式典準備係らに振る舞って労をねぎらうのだ。

さて、日が沈んだ20時頃、爆竹の音と鞭の大迫力で、ゾウの行道がスタートした。爆竹の音は、「道を広く開けて下さい。みなさん祭にご参集下さって、ご覧下さい」のサインだと私は受け止める。

私たちの席は、ソーマシリ師が前もって檀家の自宅前に用意下さってあったので、落ち着いてゾウのパレードを観ることができた。次の行列は仏旗を持って進んで来た。続く火の踊りは、あかあかと燃え盛る火の輪やトーチを振り廻しながら歩く踊り手たちである。子どもたちも行列に加わり、踊り手たちと共に頑張っている。その次に続くのは、役人だろうか、何かを手を持ってゾウに乗っている。……順々に繰り広げられていくパフォーマンスが続く。

ピンナワラから連れて来られたサママハ・ヴィハラヤのゾウは、この行列の中に…と探してみた。人が沿道にあふれ道路は異様な熱気に包まれて松明の明かりの中を華麗に飾られたゾウが照らし出されるが見分けられない。チャルメラ・ドラム・シンバルなどの楽の音で行進をはやし立てる音楽隊が時として激しいリズムを刻む。ペラヘラ祭実行委員長のソーマシリ師は、あちらのグループ、こちらの見物人と小走りで駆け回り心配りをされていらっしやる。観客は仏教徒ばかりでなく市外や他の州、外国人までを含めると70万人の人出であると云う。

仏舎利を乗せたゾウの前で躍動感に満ちたキャディアンダンスが踊られている。この踊りはもともとは、悪魔祓いの踊りであったらしい。演奏にあわせて、踊り手たちがリズムカルな踊りを披露しながら通り過ぎていった。そして祭のクライマックスの見せ場は何と言ってもきらびやかに電飾されて仏舎利をのせたゾウのパレードである。

ペラヘラ祭のパレードの構成は、各寺院によって多少異なると聞いている。鞭打ち・旗持ち・土地役人・ゾウ厩舎の長・ダンサー・副在家総代・仏歯・あるいは仏舎利を載せたゾウ・在家総代…などと続く。電飾を纏った輝くゾウ、さまざまな表情でパレードを観る人々の群れ…。ペラヘラ祭の賑わいこそ仏教の繁栄を語る尺度のような気がする。